

## 苦難を善い生き方の力にする

上 廣 哲 治

若葉の美しい季節になりました。「風薫る五月」という言葉がありますが、新緑の木立を吹き抜けてきた風は心なしか芳しい香りがするようです。

季節を楽しむ人がいる一方で、「五月病」といわれる症状で苦しむ新入生や新入社員が現れるのもこのころのことです。やる気が出ない、何を見てもつまらないなどと暗い気分になり落ち込みます。しかし「五月病」は、いわゆる病気ではありませんから時がたてば回復します。大変なのはせつかく入社したのに、上司に厳しく叱られたとか、社内の雰囲気になじめないなどという理由で、すぐに会社を辞めてしまふ社員かもしれません。それなりの事情があるのでしようが残念なことです。

社会に出ればさまざまな困難や苦難に遭うのは避けられません。いや、困難があるのが当たり前。人生には苦難がつきものだからです。「苦あれば楽あり」といいますが、苦があるからこそ、それを乗り越えた向こうに幸福があるのです。そして、その苦難を乗り越えて仕合わせになる叡知が実践倫理の教えです。なかでも「苦難福門」は、多くの会友を仕合わせに導いた教えの一つです。『実践倫理講座・

天の巻』には、苦難は決して厭うべきものではなく、「新しい出発点、成功や幸福にいたる一つの転換点」であるとあります。教えの趣旨は、苦難は、それに向き合う姿勢によって幸福に入る門であるということです。

夫婦関係、親子関係、近隣や職場の人間関係の悩み、健康や経済的な悩みなど、苦悩の内にある人が苦難からの脱出を求めてわが会に入会したという例は少なくありません。そのほとんどの人たちが倫理の実践を通して仕合わせになっています。その方々は口々に「困難を乗り越えたからこそ今の自分がある」と語っておられます。

元プロテニスプレイヤーの松岡修造さんは、親の反対を押し切ってデビューを果たし、アメリカでプレーをしていましたが、最下位クラスの大会の予選でも勝つことができず、本大会に出場できませんでした。ランキングを上げるために早朝に練習しようと相手を探しても、予選落ちした選手ということも誰も相手をしてくれなかったそうです。

野球評論家として活躍している野村克也さんは、三冠王を取るなど選手としても、また監督としても一流の野球人でした。しかし若い頃は、テスト生としてプロ野球チームに入団するも芽が出ず、コーチから「俺は選手を見る確かな目を持っているが、その俺から見ても、お前は絶対に活躍できないだろう」と言われ、クビを宣告されました。野村さんは家が貧しく、プロ野球の選手になって家計を支えようと入団したので、どんなことがあっても辞めるわけにはいきません。「クビになったら生きていけません。電車に飛び込みます」などと、脅かすような言葉で残留を訴えて、なんとか残してもらったそうです。

困難を乗り越えて福を得たのはスポーツ選手だけではありません。IPS細胞の発見でノーベル賞を

受賞した山中伸弥さんは高校生時代、柔道部で練習に励み、試合などで骨折し、そのたびに整形外科医が治してくれたことから、整形外科医になるという夢を持ちました。医学部を卒業し、病院の研修トレーニングをしましたが、他の研修医が二十分で終わる手術を、山中さんは二時間もかかったそうです。指導教官からは、「お前は邪魔だ。ジャマナカだ」などと呼ばれ厳しく指導されました。自分は臨床医に向いていないのではないかと自らの適性を見極め、臨床医の道を断念して研究者への道を歩み始めたのです。

「苦難福門」は、苦難がそのまま福に「なる」という教えではありません。苦難を福に「する」ために努力をする、実践を重ねるといふ教えです。苦難という自らの現実に真正面から向き合い、その現実があるがままに受け容れ、周囲の言に耳を傾け、境遇や心情に自らが共感できる実践に励まなければなりません。松岡さんも野村さんも、そして山中さんも、「現実大肯定」の姿勢で苦難を乗り越えるべく、「受け容れる」「聞く」「共感する」を実践することで、自分で自分を高めてきたのです。

しかし苦難といっても、いろいろな苦難があります。災害や事故に巻き込まれるなど、個人の力ではいかんともしがたい苦難があるのも事実です。それでも私たちは、その苦難を乗り越えて少しでも仕合わせに生きていかねばなりません。

子どもを失った二人の母親のことをヤフーニュースで知りました。宮城県石巻市の小・中学校で、「日米の架け橋」になりたいと英語指導の助手を務めていた米国人のテイラー・アンダーソンさんは、六年前に起きた東日本大震災の津波に呑み込まれて亡くなりました。二十四歳でした。それ以来、母親のジーンさんは何回も石巻市を訪ねるうちに、三人の子どもすべてを失った母親のいることを知りま

す。石巻市渡波地区の遠藤綾子さんでした。

遠藤さんは、十三歳の長女花さん、十歳の長男侃太君、二女奏ちゃんの三人、すべての子どもを津波で失ったのです。二人は会ううちに、遠藤さんの子どもがテイラーさんの教えを受けていたことも知ったそうです。ある日、ジーンさんが遠藤さんに贈った手作りのマフラーからヒントを得て、二人は着物の生地を使った手作りのグリーティングカードを作ってワシントンDCにあるナショナルギャラリーで販売することを考えました。カードは「石巻」と「着物」を合わせ、「イシノマキモノ」と名付けられ、石巻市の人々も参加して作りました。ジーンさんは、次のように語っています。

「遠藤さんと会って、私よりもつらい人がいることを知りました。……自分の痛みを和らげるには他人のために何かをやるしかない、と。だから、遠藤さんが笑顔になることが私たちの喜びになりました。お互いがそうすれば、(子どもを亡くした)自分たちの痛みが和らぐんです」。そして夫のアンディさんは、「他者を助けることで、私たちはそれぞれ自分が救われているんです。助け合いながら、進む道を探しているんです」と語っています。

苦難にはこのように耐え難い苦難もあります。それでも、その苦難と正面から向き合って善く生きようと努力している人々がいるのです。子どもを失った悲しみを消すことはできないでしょうが、善く生きようとする意思が仕合わせへの力になっていることがわかります。

さて、今月の実践課題です。今、自分が陥っている困難に、「現実大肯定」の姿勢で、真正面から真摯に向き合ひましょう。そして、おおらかで鷹揚な心で実践に励むのです。春の大会でも申し上げたとおり、それこそが自らの「自然回復力」を活性化するポイントだからです。